

序

西暦五八七年に物部守屋が厩戸皇子らの軍勢と戦って敗滅した事件は、古代史家によって「丁未の変」とよばれている。劣勢の厩戸皇子側が、圧倒的に優位に立つ守屋勢に対し、四天王の加護を得て勝利を収め、これによって蘇我臣氏は、六四六年の大化改新にいたるまでの六十年間にわたって、支配体制を確立した。当時の主戦場は現在の八尾市一帯と考えられ、そこには、物部守屋大連墳・守屋首洗池・鏑矢塚などがあり、太子の勝利を記念する大聖勝軍寺が建てられている。このような戦跡の北西方には、推古天皇元年（五九三）に創建されたという四天王寺が見いだされるのに対し、南東方には太子が永遠の眠りにつく上の太子、すなわち叡福寺がある。聖徳太子に関係の深い所が、なぜこういう方向で排列しているのだろうか。これらの線と、難波京から南へ直進する大道や、それと直角に交わる大津道・丹比道とは、どのような関連をもつものであるだろうか。

こういう問いかけに対して正しく答えるためには、まず古代人の政治空間に関する認知の如何を明らかにする必要がある。

perception and landscape は、一九八四年八月下旬に開かれた I G U 第二十五回コンGRES において、テーマ二十六として取りあげられた。人間の集団が何らかの行動をとり、地表空間を組織し、それを景観としてヴィジブルなものにするという一連のプロセスにおいて、当該の人間集団が空間をどのように認知してきたかを知ることが、最も基本的な研究課題の一つをなすように思われる。

現在のパーセプションが問題となるのであれば、過去の地理的事象についても、そのような分析が当然のこととしてなされねばならない。歴史の諸時期に生きた人間集団が、空間をどのように認知したうえで、それを組織したのか。過去の空間認知を復原して、その変遷をたどる。これは歴史地理学の研究領域に属するものではないだろうか。

historical geography of spatial perception は、このようにして歴史地理学の中で当然に市民権が与えられよう。

パーセプションと聞いて、ただちに思い起こされるのは、ジャン・ブリュヌ（一八六九〜一九三〇）の名著「人文地理学」（一九一〇）のことである。彼はあまりにもパーセプションを強調しすぎて、心理的相対主義者という批判を甘受しなければならなかった。しかし時は移った。戦後になってジャン・ゴットマンが「人文地理学における分析の方法について」と題する画期的な論文（アナル・ド・ジエオグラフィ、三〇一号、一九四七）において、フランス学派を生きびしく批判するとともに、心理的要因を重視するように主張しているのは、ある意味ではブリュヌ的思考様式の部分的復活とみなされよう。今日、国の内外において活発に研究がすすめられている空間認知の問題を、筆者はこのような研究史上に位置づけたいと考えている。本書は、こういう世界的な潮流に乗る研究の成果をまとめたものである。

本書の刊行に当たり、畠山文化財団から多額の助成金を頂戴した。ここに記して深く感謝の意を表したい。

昭和六十年一月